余市の人々。　第１回　【江部拓弥】

戦略推進マネージャーの連載を広報誌で掲載します！

令和元年１０月から活動を始めた余市町戦略推進マネージャーの江部拓弥（えべ　たくや）さんは、町のために様々な広報活動をしていますが、その中の一つに余市をテーマにした連載「余市の人々。」があります。

本の雑誌社のウェブサイトである「ＷＥＢ本の雑誌」（http://www.webdoku.jp/column/ebe/）に掲載されており、余市に住んでいる人々を取材し、地域に根差した人々を通して町の歴史や文化、風土などについて発信しています。

好評につき広報誌でも掲載することになりましたので、ご注目いただければと思います。あなたの知っている余市の人々が、登場するかもしれませんよ。

初めての北海道。目指した先は余市だった。２０年ほど前、宇宙飛行士となった毛利衛さんの故郷を訪ねた。季節は冬。雪国で生まれ育った僕でもへこたれるほどの寒さだったことを憶えている。

再びの余市は、その数年後。秋の終わりに、ヤンキー先生と呼ばれた義家弘介さんの元へ。あのときも寒かったなぁ。薄着の僕はぶるぶると震えていたことが懐かしい。

三度目は、ＮＨＫの朝の連ドラ『マッサン』の舞台として余市が脚光を浴びた、あの頃。ニッカウヰスキーの余市蒸溜所へ。真冬。寒さはほどほど。温暖化ですね、温暖化ですよ、なんて会話を交わしたことを想い出す。

北海道は積丹半島の東の付け根に位置する余市町。人口が２万人ほどの小さな町に、僕は何かと足を運んでいる。2020年には、日本で唯一「ｎｏｍａ」のワインリストに載ったワイナリー「ドメーヌ・タカヒコ」の曽我貴彦さんに会いに行った。またも冬。でもね、やっぱり寒さはこたえない。初めて訪れた頃に比べると、雪もずいぶんと少なく感じる。温暖化だな。

余市へ行くたび、思っていた。寂しさが漂っているのに、暗さがない。そう、余市は明るい町だと。日本全国いろんな土地に足を運んだけれど、何かが違う。なんだろう。なぜだろう。考える。考えた。けれど、ちっともわからない。

余市。おじさんの名前のような、どこかおかしみのあるユニークな名を持つ町で暮らす人たちは、何を想うのだろうか。余市の人々の話を集めることで、探していた答えが見つかるかもしれない。余市の「よ」がわかるかもしれない。話を訊いてみたい。それが「余市の人々。」のきっかけだった。

最初に会ったのは「塩田屋商店」の塩田英史さん。余市いちばんの繁華街「余市銀座商店会」にある書店の三代目の物語から始まります。

塩田屋商店

「余市ではうちがいちばん新しい書店になります」

「塩田屋商店」の塩田英史さんは言う。またまたご冗談を、なんて僕は言いたくなる。だって、さっき見た塩田屋の外観は随分と年季が入ってたもんなぁ。鉄骨が剥き出しになった寂しげな庇の姿が、僕の頭の中をふわふわと漂っている。

「庇はね、覆っていた布を取っちゃったの。だいぶくたびれてましたから。古いからね、うちの書店も」

庇のことを塩田さんに訊くと、そんな答えが返ってきた。今度は僕も、そうですよね、と納得する。でも気づく。さっきは「新しい」だった塩田屋の形容詞が「古い」に変わっていることに。塩田さんに目をやると、いたずらっ子のような笑顔を見せる。

北海道の余市町には３軒の書店があると、塩田さんは言う。正確に言えば、個人で営む書店、いわゆる町の本屋さんが３軒、ある（余市駅の近くにTSUTAYAがあるんですよね）。その３軒の中では塩田屋がいちばん新しい、らしい。塩田さん、この日のために、店の来し方を調べてきたという。

「実は私もうろ覚えだったり、知らないこともありますからね。これ幸いですよ」と、笑う。

「うちが正確に何年やっているかはわかりません。はっきり言えるのは、株式会社になって2020年で６７期目ということです」

塩田屋の創業者は塩田さんの祖父だ。そもそも、塩田家の出自は石川県にあった。むかしむかし、余市で鰊が豊漁だと聞いた塩田さんの曾祖父は、はるばるきたぜ余市、というわけで、そのまま移住。かの地で所帯を持った。おかげで、塩田屋の礎を築いた塩田さんの祖父は余市で生まれ、育つことになる。

「祖父は、いまもある余市でいちばん古い書店に憧れて本屋を始めたと聞いています。祖父が生まれた年が1900年なんです。二十歳で商売を始めていれば今年でちょうど100年。ただ、祖父は未成年で塩田屋を開いたという話なので、そう考えると、うちは100年とちょっとということになりますかね。記録が残ってないから、本当のところはわかりませんよ」

老舗だなぁ、と思う。１世紀以上続く町の本屋さんはいま、日本にどれくらいあるのかな。そして、塩田屋がいちばん新しいということは、100年の歴史を持った本屋が余市には３軒もあるということに、驚いた。（続く）

問合せ　企画政策課　企画グループ　☎２１ー２１１７